

論 文

When you think X, you think Yのアイロニー的使用について*

鈴木 亨

1. はじめに

本稿ではコーパス調査に基づき、When you think X, you think Yの形式を基本パターンとする(1)のような英語表現について、一定の変異の幅を持つよくある言い回しとして慣用化のプロセスにあることを指摘する。関連する様々な変異型は、全体としてプロトタイプ・カテゴリー的なネットワークを形成していると考えられる。さらに、この表現は、談話・語用論的にある種のアイロニーの解釈と親和性があり、テレビの報道番組や商品の宣伝など、話し手が有益かつ新奇な情報を聞き手に提示するような場面を中心に、会話上の戦略的な指手 (gambit) として使用されるジャンル依存的な構文表現として確立しつつある可能性について論じる¹。

- (1) a. **When you think Rocky, you think Stallone.** (COCA, BLOG 2012)
b. Because **when you think penguins, you think cold weather, you think ice...**
(COCA, SPOK 2017)

以下では、当該の表現 When you think X, you think Yを WYTXyty と呼ぶ。WYTXyty は、条件節 (When you think X) と帰結節 (= 主節) (you think Y) の組み合わせから構成され、日本語に訳すと概ね「X といえば Y ですよ」という表現に対応し、X から連想される典型例として Y を提示するものである。X と Y は変項としてのスロットで、通常は名詞句で埋められる。話しことばを中心にややくだけたスタイルで用いられるため、フォーマルなテキストではほとんど見ることはない。そのような理由もあり、この表現について構文やよくある言い回しとして言及した先行研究や文法書は管見の限り存在しない。実は、後述する WYTXyty の基本的特徴を忠実に保持する事例は、本研究で主に使用した現代アメリカ英語のコーパス COCA の検索結果

* 本稿は、日本英語学会第41回大会シンポジウム「語を味わい尽くす—「多面的な理解」の実践」(2023年11月4日、於東京大学駒場キャンパス)における発表「When you think X, you think Yの周辺—談話・語用論的機能と主語代名詞 youの選好」の内容を部分的に含んでいる。コメントをいただいた参加者の方々、とりわけシンポジウムを企画していただいた平沢慎也氏に感謝したい。査読者からも有益な指摘をいただいたことをここに記し、感謝したい。

1 本稿では例文の重要箇所を執筆者の判断によりボールド体で表記する。

において、それほど多いわけではない²。しかしながら、COCA 以外の現代英語のコーパスにおいても、類例が一定数観察できるという事実もあり、また3節で見るように様々なかたちで変異型と見られる一群の関連表現が存在する。

- (2) a. **When you think** poor governance, **you think** liberalism. (iWeb)
- b. **When you think** RPG, **you usually think** quests. (iWeb)
- c. **When you think** kindness **you think** care bears, fuzzy baby seals and cute toddlers. (GloWbE, PH)
- d. Generally, **when you think** leather, **you think** Italy, not Pakistan. (Coronavirus, PK)

本稿の目的は、これまでの研究ではほとんど注目されたことのない WYTXyty 及びその変異型の構文表現としての基本的特徴を分析し、その談話・語用論的な機能と構文化の背景について考察することである。2節では、WYTXyty の基本的特徴を、形式と意味解釈の面から確認する。3節では、当該表現の様々な変異型の拡がりを概観する。4節では、COCA での検索に基づき、動詞 think の自他用法と反復形式、主語代名詞の選択、逆接的文脈での使用状況の相関についての調査結果についてまとめる。5節では、WYTXyty のアイロニーとしての解釈とその機能について考察した上で、この表現がテレビの報道番組や商品の宣伝など特定の場面で使用されやすいジャンル依存の構文表現である可能性を指摘する。6節が全体のまとめとなる。

2. WYTXyty の基本的な特徴

WYTXyty の形式上の主な特徴として、条件節と帰結節における主語 you と動詞 think の反復と、think の他動詞用法の2点が挙げられる。連結した2つの節における主語と動詞の反復は、話し手の意図的な選択を反映したものであると考えられ、英語のよくある言い回しのレパトリーとしてこの表現が存在していることを示唆している³。

一方、動詞 think は一般的には自動詞であり、思考対象を表す名詞句は通常 of や about などの前置詞を伴って生じるので、この表現において他動詞として使用されることは変則的であると同時に、ここでも話し手による（半ば無意識であれ）選択がうかがわれる。

本来自動詞である think の変則的な他動詞用法を、鈴木 (2022a, b) は、「疑似他動詞用法」と呼び、

2 WYTXyty の形式上の基本特徴を、後述するように 'you think' の反復と think の疑似他動詞用法の2点とすると、COCA における完全に忠実な事例は7件である。

3 Crystal (2021: 26-27) は、形式的な反復（特に述語部分）を持つ定型的表现（e.g., 'It takes what it takes./If I die, then I die!'）が、聞き手への注意喚起を通じて様々な語用論的機能（会話の終結や断言など）を持つと述べている。関連して、Spreadbury (2022: 161-162) は、皮肉の構文表現 'X they said Y they said' の分析において、当該表現における 'they said' の反復という有標形式 (marked form) が、グライスの会話の公理に従い、聞き手により深い読み取りを求める合図になっていると指摘している。

次のような例を含むいくつかの使用パターンについて考察している。

- (3) a. It's a big game. **Think baseball.** (映画 *Trouble with the Curve*)
 b. I wonder how many people actually **think music** when they are listening to it ... very few I bet [...]. (David Lodge, *Thinks ...*)

(3a) では、少年野球のチームがバスで移動している場面で監督が選手たちに言うセリフとして、「(大事な試合なんだ。) 野球に集中しろ」という意味で使われている。(3b) は、「(コンサート会場で) 音楽を理解しようと本当に集中して聴いている人などほとんどいないだろう」ということを述べている小説中の使用例である。いずれも、思考対象への意識の集中が強調された用法である⁴。

次に、WYTXTY の意味解釈上の特徴を見てみよう。この表現は、字義通りには、話題とされている X に関して「X の典型例は Y である」という情報を聞き手に伝えるものである。言い換えれば、談話に新情報として Y を導入する機能を持つといえる。くだけたスタイルで使われるので、自然な日本語にすれば、「X といえば Y ですよ」というような表現になるだろう。

ところが、この表現が実際に使われる文脈を調べてみると、直後に「X の典型例は Y である」という命題を否定するような話の展開になる事例が多く観察される。次の例は、いずれも COCA の検索例を前後の文脈とともに引用したものである。

- (4) a. OK, we have... KOTB: Oh, penguins. Ms-JACOBS: Let me introduce you to these guys. MORALES: Hi, Ms-JACOBS: This is R.J. R.J. is about four months old. And this is Lelo. Lelo is about two and a half years old, MORALES: Oh, cute. KOTB: What are they doing in Miami? Can I ask you that? Why are penguins here? Ms-JACOBS: Well, these are African penguins. CURRY: African penguins. Ms-JACOBS: There are 17 species of penguins. Only five are cold-weather birds. All the others are moderate-weather birds, KOTB: Oh, I didn't know that, Ms-JACOBS: Yeah. So they're very happy here in Miami, MORALES: Yeah, they like the sun, Ms-JACOBS: They're just... KOTB: Because **when you think penguins, you think cold weather, you think ice...** Ms-JACOBS: Absolutely. Absolutely. KOTB:... and the rest of it. **But that's not the case.** MORALES: How old are the penguins? I mean, what is their life expectancy? Ms-JACOBS: African penguins can live about 30 years in captivity. MORALES: Wow. (COCA, SPOK 2017)

4 前置詞脱落を伴う自他交替 (他動詞化) 一般について、Dixon (2005: 303) は、活動における卓越した要素への焦点化という機能が関与していると指摘している。また、think の用法とは直接関係ないが、動能交替 (前置詞 at の有無) に関して、Perek (2015) は、構文交替における有標性 (標準形と比べた出現頻度の低さ) が、意味解釈に与える影響について論じている (鈴木 (2022a) も参照)。

- b. And now some experts warn that risk may be greatest for those who are most vulnerable: our children, CHILDREN'S-MENU-PA# Unidentified Teacher: (Voiceover) If your name starts with the letter T... Children: (In Unison) Me! Teacher: T: Timmy and Tyler, Good job. Go wash your hands, (Footage-of-woman-c) HAROLD-DOW-reporti: (Voiceover) It's snacktime at the Overbrook preschool in Columbus, Ohio. How many of you like apples? Class: (In Unison) Me! DOW: Raise your hands, (Footage-of-childre) DOW: (Voiceover) The kids sure love what's on the menu... Unidentified Child 1 : They taste good, DOW: (Voiceover) ... which makes their parents happy. Mrs-MICHELLE-CUNNI: **You think healthy food, you think fruits and vegetables.** (Footage-of-washed-) DOW: (Voiceover) **But not everyone is so pleased.** Mr-WILES: When we looked at FDA's data for three years, we found that one out of four apples had three or more pesticides on it. (COCA, SPOK 1994)

(4a)は、テレビの報道で、温暖なマイアミに（なぜか）ペンギンがいるという話で、「ペンギンといえば、寒い気候で、氷があつてと思いますよね…」 「ところが、ここは違うのです (But that's not the case.)」という展開となっている。(4b)もテレビの報道であるが、幼稚園の先生が子どもたちに「みんな、りんごは好きですか」と聞き、子どもたちがりんごを食べているシーンから、「体に良い食べ物といえば、果物と野菜ですよね」「ところがそれを心配している人たちもいるのです (But not everyone is so pleased.)」と、その後りんごの残留農薬の問題に話が移っていく。

これらの例における当該表現の使用に際し、後続する文脈で、X（話題となるカテゴリー）とY（典型例／連想対象）の結びつきが否定される（自分で否定する）ことを話し手は予期している。つまり、話し手は、WYTXyty 構文を使うことにより、自身の信念とは反することをあえていったん「聞き手の考え」として提示した上で、直後に提示されるそれとは異なる自説を際立たせるように談話の流れを操作しているように思える。WYTXyty が持つ主語と述語の構造的反復と本来的自動詞の疑似他動詞用法という形式上の有標性は、いずれも認知上聞き手の注意を喚起する機能を持ち、字義通り以上の深読みを誘発しうるものである。つまり、(4)のような例において、この表現の使い手は、聞き手にとって何らかの談話・語用論的な効果が生じることを（半ば無意識に）期待していると考えられる。

次節では、コーパス調査によって確認された WYTXyty の形式上のいくつかの変異型について概観し、それらを含めて全体がプロトタイプ・カテゴリーの特性を示すネットワークを構成している可能性について論じる。

3. プロトタイプ・カテゴリーとしての WYTXyty とその変異型表現

WYTXyty とその関連表現は、主に会話などややくだけたスタイルで使用されることが多いため、本研究では話しことばを含む8つのジャンル (TV/Movies, Spoken, Fiction, Magazine, Newspaper, Academic, Web/Blog, Web/Genl) から均等にテキストが収録された現代アメリカ英語のコーパス COCA を中心に、English-Corpora.org に含まれるその他のコーパスを補助的に使用し、事例を収集した (検索時期は2023年7月から8月)。

コーパスを使用した上記の検索調査の結果、WYTXyty には、形式上の変異型と考えられるケースが多様なかたちで存在し、それぞれの機能も必ずしも均質的ではないことがわかった。WYTXyty は1つだけ自律した構文として存在するわけではなく、互いに関連づけられる変異型を含む表現のネットワークとして、プロトタイプ・カテゴリーの特性を示していると考えられる (Taylor 2015)。以下では、次の5つの変異パターンに分けてそれぞれの概要についてまとめる。

- A. 動詞 think の自他用法に関する変異
- B. 帰結節の動詞に関する変異
- C. 帰結節の文パターンに関する変異
- D. 条件節の文パターンに関する変異
- E. 主語代名詞の選択に関する変異

3. 1 A. 動詞 think の自他用法に関する変異

動詞 think が他動詞ではなく、標準的な自動詞用法のもの (When you think of X, you think of Y) もあり、さらに条件節と帰結節で自他用法が混在する事例も、比較的少ないが存在する。(5) は、条件節、帰結節ともに前置詞 of を伴う自動詞用法の形式である。(6a) は、条件節が他動詞用法で、帰結節が自動詞用法、(6b) では、その逆のパターンとなる。

- (5) a. And **when you think of** pirates, **you think of** these, you know, 6' 5" guys.
(COCA, SPOK 1999)
- b. But **when you think of** kids, **you think of** more immediate things like, "Will terrorists blow up a nuclear bomb?"
(COCA, MAG 2010)
- (6) a. And **when you think** spring break, **you usually think of** college kids, don't you?
(COCA, SPOK 2004)
- b. **When you think** of Las Vegas, **you think** money.
(COCA, SPOK 2003)

4節で見るように、COCA の検索では、動詞 think の標準的用法である自動詞用法の方が疑似他

動詞用法よりも事例数が多いことから、疑似他動詞用法それ自体は、自動詞用法に対して派生的なものとして位置づけることができる。その一方で、WYTXytyにおける疑似他動詞用法はCOCAを含む複数のコーパスにおいても一定数の事例が見つかることから、単なる「誤用」や「逸脱」という以上の拡がりをもって使用されていることが示唆される。

3. 2 B. 帰結節の動詞に関する変異

帰結節において、主語+述語動詞として you think の反復ではなく、それ以外の主語+動詞の組み合わせが生じる事例が少なからずある。もっとも多いのは、Y come(s) to mind (帰結節の変項 Y が主語になる「(X といえば) Y が頭に浮かぶ」) を典型例とする他の動詞 (pop (into) など) を含む変異型である。さらに、Y come(s) to mind が関係節化され、there [is/are] Y (「思いつくものに Y がある」) や the [first/last] thing is Y (最初/最後に思いつくのは Y である) などの形式と結びつく表現もある。いずれも X の典型例として思いつくであろう Y を挙げるという点で、WYTXyty と同等の情報を伝える表現である (ただし、the last thing の場合は、文全体として X の典型は Y ではないという反転した否定判断となる)。

- (7) a. When you think mafia, **cocaine trafficking or loan sharking may come to mind**.
(COCA, MAG 2012)
- b. When you think technology, **there are probably a few familiar faces that come to mind**—
Bill Gates, of course; Andy Grove of Intel; maybe even Amazon's Jeff Bezos.
(COCA, MAG 2000)
- c. When you think romance, **the last thing that pops into your head is mopping, washing
the dishes and scrubbing the toilet**.
(COCA, WEB 2012)

(7a) では、構文解釈上 Y に相当する 'cocaine trafficking or loan sharking' は、帰結節の主語として生起し、それに対応する述部が 'may come to mind' となっている。(7b) では、帰結節が there 構文となり、意味上の主語 'a few familiar faces that come to mind [...]' が Y に相当する解釈を持つ。(7c) では、'the last thing that pops into your head' が帰結節の主語となり、'mopping, washing the dishes and scrubbing the toilet' の部分が解釈上 Y に相当する。

3. 3 C. 帰結節の文パターンに関する変異

帰結節 (主節) の文パターンとして、疑問文や否定文になる例が多く観察される。

- (8) a. WHEN you think adventure, **what comes to mind?** (COCA, MAG 1999)
- b. **What do you think about** when you think deep-fried turkey? (COCA, SPOK 2000)

- c. When you think Star Wars, **you don't think** Tattoine, Death Star, and Wookie. **You think** Luke, Vader, and Obi Wan. (COCA, WEB 2012)

(8a) は, think の代わりに come(s) to mind を用いた疑問文, (8b) は, 条件節が後置され, 帰結節(主節) が疑問文として文頭に生じている例であり, いずれも When you think X に対する典型例 Y を問う形式となっている。一方 (8c) では, 帰結節が否定文であるが, 後続する肯定文が, あらためて典型例 (Luke, Vader, and Obi Wan) を提示する役割を担っている。この例は, 情報提示の順番は異なるが, 談話上の機能としては, 先に指摘した逆説的文脈で使用される WYTXyty とほぼ等価であるといえる。

3.4 D. 条件節の文パターンに関する変異

条件節の変異型として, 命令文となる例, さらに接続詞 when が脱落する例がある。(9a) では, 接続詞 and により事実上条件を表す命令文が, 帰結を表す後続節と関連づけられている。(9b) における when の脱落は, この表現が話しことばで多用されることの反映と考えられるが, 先行節が条件, 後続節が帰結を表すという解釈は文脈上明らかである⁵。

- (9) a. **Think Einstein and you think relativity.** (COCA, NEWS 2005)
 b. **You think healthy food, you think fruits and vegetables.** (COCA, SPOK 1994)

3.5 E. 主語代名詞の選択に関する変異

主語代名詞の選択として you 以外に we, they, I の使用が一定数確認できる。いずれも上記のさまざまな変異型 (自動詞用法, 他動詞・自動詞用法の混交, 帰結節における think 以外の述語動詞の使用, 疑問文・否定文など) が, 件数にばらつきはあるものの同様に生じている。(10) が we, (11) が they, (12) が I の実例となる。それぞれの代名詞がどの程度 when および think との組み合わせで生じるかは, 4 節で確認する。

- (10) a. Today, **when we think** Guernica, **we think of** the artist's Cubist evocation of agony - those twisted, turning human forms - and then of the ghastly evisceration that inspired it. (COCA, NEWS 2006)
 b. but **when we think** cherry tomato, **we think of** the juicy, ripe, round tomatoes we ate

5 事例数は少ないが, 条件節で think 以外の動詞が使われる場合もある。

(i) a. **When you hear the name Bordeaux,** you think wine. (COCA, BLOG 2012)
 b. Although **every time you look at him,** you think Monica, you think impeachment. (COCA, SPOK 2003)

(ib) では, when の代わりに every time が使われているが, 条件と帰結の解釈 (X といえば Y) は, 基本パターンと同等である (この例における him は, 米国のクリントン元大統領のこと)。

straight from the vine as kids and now spear in summer salads as adults.

(COCA, MAG 2012)

- (11) a. **When they think ebooks, they think Kindle.** (COCA, BLOG 2012)
b. Most people, **when they think arms, they think biceps.** (COCA, TV 2019)
- (12) a. **When I think “fundamentals,” I think unemployment, economic growth, federal budget, etcetera,** all of which have remained mind-numbingly horrible during the president’s tenure.
(COCA, WEB 2012)
b. **When I think grill, I don’t think cauliflower.** But this recipe produced the best cauliflower I’ve ever put in my mouth. (COCA, NEWS 1998)
c. [...] **when I think gorillas, I think farting contests.** (COCA, WEB 2012)

3.6 プロトタイプ・カテゴリーとしての拡がり

上述したように、WYTXytyには、構造上、また語彙選択の上でも幅広い変異型が存在し、一見してまとまりのある構文とはみなしにくい。しかし、単文ではなく、条件節と帰結節からなる複文構造を持つことにより、構造上の変異の幅が拡がるのはある意味で自然である。また、話しことば中心の表現であることにより、発話における「乱れ」がコーパス上のデータに反映されていることも1つの理由である。また、後述するように一定の理由に基づいてyouが主語として選好される傾向があると考えられるが、文の主語位置自体は一般的にイディオムや構文表現において選択的スロットになりやすいため、他の代名詞の生起も排除されるわけではない。そのような理由で、コーパス上で確定できる事例数が少ないわりに変異の幅が広く、直感的に構文として捉えにくい表現ではあるが、それぞれが互いに関連づけられたネットワークとして、Taylor (2015)のいうところのプロトタイプ・カテゴリーの特性を示していると分析することが可能である。つまり、関連表現の相互的なネットワークにおいて、個々のメンバー（表現形式）がそれぞれ異なる程度でよくある言い回しとして構文化の途上にあると考えられる。本稿では紙幅の都合で、ネットワークを織りなすメンバー間の相互の関係について詳細に論じることはできないが、関連表現の中で、‘you think’を主語・述語として反復するWhen you think (of) X, you think (of) Yが中心的メンバーの1つであることは、次節で見る検索結果からも一定の根拠が与えられると思われる。次節では、さまざまな変異型のうち、他動詞用法と自動詞用法、条件節と帰結節における動詞thinkの反復、主語代名詞の選択に焦点を絞り、COCAの検索結果に基づく分析を示す。

4. WYTXytyと変異型の使用状況

この節では、WYTXytyとその変異型のうち、他動詞用法と自動詞用法、条件節と帰結節における動詞thinkの反復、主語代名詞の選択に焦点を絞り、COCAにおける検索結果をまとめ、

これらの表現の使用状況について分析する。

表1は、条件節の主語代名詞に基づく分類 (you/we/they/I) を、動詞 think の他動詞用法と自動詞用法でさらに分類したものである。基本となる母数 (カッコ内の数値) は、{when you think [nn*][y*]}, {when you think [nn*][nn*][y*]}, {when you think ADJ [nn*][y*]} の3通りの検索で条件節を抽出し (代名詞は、you/we/they/I の4通り)、その結果から関連のない事例を除いて合計したものである⁶。この母数には、前節で変異型の例として見た帰結節が疑問文・否定文であるもの、帰結節の述語動詞が think 以外のもの (come(s) to mind など) を含んでいる。それに対し、条件節と主節の両方で think の反復があるものの件数をカッコ内の母数の左側にそれぞれ示している (条件節と帰結節で動詞の自他用法が異なるケースも若干含まれるが、比較的少数である)。

表1. 条件節の動詞の自他と代名詞選択 (COCA)

条件節 (他動詞用法) 件数	条件節 (自動詞用法) 件数
When you think X, 11 (20)	When you think of X, 33 (80)
When we think X, 3 (3)	When we think of X, 54 (99)
When they think X, 9 (9)	When they think of X, 24 (34)
When I think X, 9 (12)	When I think of X, 69 (97)

代名詞の選択に関わらず、自動詞用法の方が他動詞用法よりも事例数が相対的に多いのは、自動詞型が本来標準的用法であることの反映として当然であるが、この検索結果からは他動詞用法も単なる「逸脱」という以上に使用の拡がりがあることがうかがわれる。なお、COCA には、SPOK 以外に、NEWS, MOV, WEB などのジャンルにも話しことばのデータが含まれており、事例のほとんどはそのような話しことばのソースによる。

When you think (of) について見ると、条件節と帰結節 (主節) で 'you think' が主語 + 述語として反復する事例の比率が、特に他動詞用法において高いといえる (他動詞用法では55% (20件中11件)、自動詞用法では41% (80件中33件))。反復のある件数同士の比較でも、他動詞用法11件に対して自動詞用法33件という生起数は、他動詞用法が本来非標準的であることを考えると、you と think の他動詞用法の組み合わせに一定の選好が働いていることが示唆される。

When we think (of) について見ると、上の you の場合と比較して、条件節での自動詞用法 (99件) に対する他動詞用法の件数 (3件) が極端に少なく、帰結節でも他動詞用法の 'we think' が反復されるケースは次の1件のみであった⁷。

6 これらの検索式では、think の目的語に冠詞がついている場合、目的語が and で等位接続されている場合、条件節と帰結節が元データにおいてカンマで区切られていない場合などは捉えることができないが、試行的な検索でそのような事例がかなり稀であることが判明したので、今回の調査では検索対象から除外している。

7 'immutable' はほとんどの辞書では形容詞とされるが、名詞とする記載がないわけではなく、例えばインターネット上の辞書である Wiktionary には、名詞として 'something that cannot be changed' と記述されている。この文脈では、「人体の不変の性質 (immutable properties of humans)」というような意味で使われており、名詞として解釈しても差し支えないと思われる。

- (13) **When we think immutable, we think genetics**, when we think genetics, we look at identical twin surveys. (COCA, NEWS 2017)

When they think (of) について見ると、関係節化された事例が少なからずあり（他動詞用法33%（9件中3件）、自動詞用法41%（34件中14件））、また、whenを含む条件節が後置される事例が半数に及ぶ（他動詞用法44%（9件中4件）、自動詞用法56%（34件中19件））。さらに、他の代名詞の場合にはほとんど見られない条件節の挿入節的使用も散見された。全体として母数となる事例が他の代名詞の場合より少ないこともあり、条件節と帰結節の組み合わせを構文的まもりとして認識することが相対的に難しいという印象がある。

- (14) a. Most people think of red wine **when they think sangria**, (COCA, MAG 2006)
b. They are **what people think of when they think headphones**; (COCA, MAG 2019)
c. Most people, **when they think arms**, they think biceps. (COCA, TV 2019)

(14a, b) では、条件節が後置され、(14b) ではさらに、条件節を含む文全体が関係節化されている。(14c) では、条件節が挿入節的に使用されている。実は(14)に挙げた例では、いずれも条件節のtheyの先行詞に当たる名詞句が直前に生じているという共通点がある。表1の検索結果（代名詞主語に限定）には含めていないが、(15)のように条件節の主語が普通名詞（複数形もしくは複数概念）で、帰結節でそれに対応する代名詞theyが使用されている例も少なからずある。

- (15) a. When **consumers** think books, **they** think Amazon. (COCA, BLOG 2012)
b. When **the public** thinks source, **they** think Deep Throat. (COCA, FIC 2008)

(14) や(15)のような例では、theyが文脈上具体的な指示対象を持つという点で、youやweのより開かれた総称用法とは若干意味合いが異なる。これらの名詞句主語は、「多くの人々 (most people)」、「消費者 (consumers)」、「一般大衆 (the public)」など総称用法の‘people in general’に近いものが多いが、theyを用いた表現は、あくまでも「話し手と聞き手」をthinkの行為主体から排除した言い方であり、you think（あるいはwe think）の構文化プロセスとは少し異なる動機づけが機能していると考えられる⁸。

When I think (of) について見ると、そもそも代名詞Iには総称用法はないため、他の代名詞の場合と違い、(仮定の)一般論を述べるというよりも、「Xといえば私はYを思い出します」と

8 人称代名詞の総称用法については、Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002), 中山 (2016)などを参照。代名詞theyの使用は、一般的に話し手・聞き手から対象に向けて心理的距離を置くことにより、社会批評など批判的・客観的文脈との親和性があるといえる。このtheyを主語とするパターンもWYTXTYのネットワークに関連づけることは可能であるが、より周辺的な位置づけになると考えられる。

いうように、自分の思いをありのままに体験的に語る事例が多い。表2で見ると、When I think (of) において逆接的展開が少ないのも、使用に適した文脈の違いを考慮すればある程度自然な帰結であると考えられる。

- (16) It's just, **when I think** doctor, I think, you know... heart attack on a plane, "Is there a doctor on board?" That kind of thing, you know, it's so cool. (COCA, MOV 2007)
 (とにかく私にとって医者といえば、ええと、飛行機で心臓麻痺を起こした人がいて、誰かお医者さんはいませんか？みたいなイメージですね。そんな感じで、かっこいいですよ。)

次に、表1と同じ検索事例を母数として、代名詞の選択と逆接的文脈での使用の相関を見る。カッコ内の母数は表1と同じで、その左側のカウント数は、逆接的文脈での使用と認められる事例数である。カッコの左側のスラッシュ [/] の前後で、帰結節(主節)内でも主語+動詞(think)の反復がある事例件数と、反復のない事例(come to mind など他の動詞表現)を含めた件数を示している。

表2. 逆接的文脈(反復あり/なし)と代名詞選択(COCA)

条件節(他動詞用法)件数	条件節(自動詞用法)件数
When you think X, 8/13 (20)	When you think of X, 22/62 (80)
When we think X, 0/ 0 (3)	When we think of X, 36/57 (99)
When they think X, 5/ 5 (9)	When they think of X, 19/22 (34)
When I think X, 2/ 3 (12)	When I think of X, 6/ 7 (97)

When you think (of) について見ると、逆接的文脈での使用率(反復なしを含む)が、他動詞用法の65%(20件中13件)、自動詞用法の78%(80件中62件)と、ともに高いのが特徴である。

When we think (of) について見ると、もともと件数の少ない他動詞用法は逆接的文脈での使用例が1つもないが、自動詞用法の使用率は58%(99件中57件)である。

When they think (of) について見ると、逆接的文脈での使用率(反復なしを含む)は、他動詞用法の56%(9件中5件)、自動詞用法の65%(34件中22件)と、When you think (of) と並び、自動詞用法・他動詞用法ともに高いが、事例数はyouの場合ほど多くはない。また、上述したように、条件節の後置や帰結節の関係節化を含む事例が多く、語順を含めた構文的まとまりは見出しにくい。

When I think (of) について見ると、逆接的文脈での使用率(反復なしを含む)が非常に少ない(他動詞用法の25%(12件中3件)、自動詞用法の7%(97件中7件))。これは、先に述べた通り、代名詞Iには総称用法がなく、When I think (of) の使用は、自分の考えを(後で否定するという想定なしに)ありのままに話す体験的語りが多いことの反映であると考えられる。

これらの検索結果から、When you think X, you think Yだけが他のパターンから独立した構文表現であると結論づけることは難しい。しかし、様々な変異型を含む関連表現の総体がプロトタイプ・カテゴリーの性質を持つネットワークを構成するという観点からすると、条件節と帰結節における主語と動詞の反復と think の疑似他動詞用法の組み合わせという認知上の際立ち（有標性）を備え、逆接的文脈での使用率が他のパターンよりも相対的に高いという点で、When you think X, you think Yを当該のネットワークにおける（少なくとも1つの）典型例とみなしてよいと思われる⁹。

次節では、WYTXyty が、関連表現のネットワークにおける典型の1つとして構文化のプロセスにあるとすれば、そこにどのような機能と動機づけがあるかについて考察する。

5. よくある言い回しを動機づけるもの—アイロニーとしての WYTXyty

代名詞 you と動詞 think の組み合わせの反復を特徴とする WYTXyty が、よくある言い回しとして認知される上で、どのような機能と動機づけがあるだろうか。まず重要と思われるのは、WYTXyty における you は、目の前にいる直接の聞き手だけではない、一般の人々を指示対象に含む総称用法であると考えられるが、you 本来の語彙的意味により、話し手自身は原則として除外されるという点である。逆説的文脈におけるこの表現は、一般の人々を含む聞き手の通念をあえて確認し、それとは異なる自分の見解を展開するための前置きとして使用されている。話し手にとっては、聞き手の注意を惹きつつ自分の持つ情報や考えを効果的に提示することが目的ということになる。一方、聞き手からすると、この表現にある程度慣れ親しんでいれば、そこで具体的応答 (Yes/No) が求められていると理解するのではなく、それに続く話し手による新情報の開示への期待を暗示的に喚起するものといえるだろう。そのような意味で、この表現は、聞き手の知識や信念の確認のために発せられるのではなく、あらかじめ用意された考えを説得的に展開するための話し手の戦略的な指手 (gambit) として機能しているとみなすことができる¹⁰。

字義通りの情報伝達が主目的ではなく、相手からの直接の言語的応答を期待することなしに、あえていう定型表現は、広義のアイロニーの一種と捉えることができる。アイロニーの概念、お

9 WYTXyty における think の他動詞用法と自動詞用法のどちらを典型とみなすべきかという検討課題を査読者から提起された。一般的に think の自動詞用法が標準的であることは明らかであり、多くの話者にとって他動詞用法は派生的に獲得されるものと位置づけられる。しかしながら、think の他動詞用法は全般的に拡張傾向にあるわけではなく、「他動詞化」はいくつかのジャンルや場面に限定されていると考えられる（鈴木2022b）。後述するように WYTXyty も同様に分析できる可能性が高く、構文化において他動詞用法の形式が認知上の際立ちとして逆説的文脈と関連づけられると考えるならば、他動詞用法の WYTXyty がいわば完成形であり、自動詞用法はそこに至る中間的存在ということになる。つまり、局所的な構文化の観点からは、他動詞用法の方がネットワークにおける典型になることが予測される。ただし、WYTXyty の構文として確立プロセスについては、さらに広範な調査が必要であろう。

10 'gambit' とは、本来チェスの用語として先制的な指手を意味するが、ここでは Michaelis and Feng (2015: 149) における「会話上の指手 (conversational gambits)」という用語に倣い、会話を優位に進めていくためのある種の決まり文句を指す。

よびその言語表現としての解釈をめぐってはさまざまな考え方があがるが、ここでは、ウィルスン/ウォートン (2009) のアイロニーの考え方に倣い、アイロニーとしての WYTXTY の使用について考えてみたい。ウィルスン/ウォートンによると、他人の発話を繰り返す、あるいは内容が類似した発話をする「再現的用法 (echoic use)」において、話し手は自分を言語内容とは切り離す乖離的態度 (dissociative attitude) を示すことができるとする ((17) は、前掲書: 197から一部修正して引用)。

(17) Peter: It's a lovely day for a picnic. (ピクニック日和だね。)

Mary: *It's a lovely day for a picnic, indeed.* (まさにピクニック日和ね。)

この例におけるメアリーの発話は、ピクニックに出かけたら雨が降り出したという状況では、明らかにおかしいと思いつつ、あざけるようにピーターの発話を再現しており、このように、他者の発話や考えを自分とは切り離して再現することによりアイロニーが生じると彼女らは論じている。ここでは、相手の発言を引用して再現しているが、再現される内容は、次のように発話や顔の表情などから推論した暗示的内容である場合もある ((18) は、前掲書: 198-199から一部修正して引用)。

(18) Peter: I think I'll have another gin. (ジンをもう一杯いただくとしよう。)

Mary: [warningly] I wouldn't, if I were you. (私だったら、やめとくけどね。)

Peter: *Oh, right, I agree. I'm getting drunk.* (分かりましたよ、たしかに飲み過ぎですよ。)

ピーターの2回目の発話 (イタリック部分) において、ピーターは自分では飲み過ぎとは思っていないにもかかわらず、メアリーがほのめかしている内容を再現しており、そこにアイロニーが生じている。このように、ウィルスン/ウォートンによると、アイロニーは、「ある考えを誰かに転嫁する、転嫁的用法の一種で、誰かに考えを転嫁することによって、自分とは切り離す乖離的態度を示して再現するもの」(前掲書: 199) と定義づけられる。

アイロニーには、定型化された表現があり、Michaelis and Feng (2015: 148-149) は、そのような定型表現を「組立済みの気の利いた表現 (preassembled wit)」と呼んでいる。話のつなぎに使われるそのような定型表現は、会話のレパートリーとして慣習化され、ユーモラスに、ときによそよそしさも伴いつつ (in a humorous—if also occasionally alienating—way)、心情に基づく評価 (affective judgments) を示す決まり文句であると特徴づけられる¹¹。

11 「組立済みの気の利いた表現」は、より一般的には Wray (2002) の「定型的言語連鎖 (formulaic sequence)」の一種として位置づけられる。Wray による定型的言語連鎖の定義は次の通り: a sequence, continuous or discontinuous, of words or other elements, which is, or appears to be, prefabricated; that is, stored and retrieved whole from memory at the time of use, rather than being subject to generation or analysis by the language grammar. (Wray 2002: 9) (語

そのような定型表現には、空きスロットを伴い構文化されたものがあり、Michaelis and Feng は、その一例として英語の分裂疑問文 (Split Interrogative: e.g., *What are you, a senior?* / *What is this, Spain?*) について分析している。この表現は、形式的には wh 疑問文とそれに対する答えのセットから構成される。疑問文に対する回答は、当該の文脈で想定される基準からはかけ離れたものであり、表現全体として現在の状況に対する話し手の否定的評価として、つまり語用論的な当てこすり (sarcasm) として機能するとされる¹²。

WYTXyty が一種のアイロニーであるという主張は一見わかりにくいだが、ウィルソン/ウォートンの「再現用法」の考え方に従うと、WYTXyty は、話し手が信じているわけではない、人々一般の考え方 (X といえば Y である) を、聞き手に転嫁して述べる形式であるといえることができる。WYTXyty の主語は you なので、話し手自身の信念は問われないが、総称用法の解釈から「X といえば Y」という内容は、聞き手から敷衍される一般の人々に共有される内容ということになる。その先に「実は Y ではなく Z」という展開に進める意図を持つ話し手は、この表現を用いることにより、暗黙に (あるいは予告的に) 現状 (current circumstances) への違和感を表明しているといえる。現状への批判的態度表明 (negative assessment) は、アイロニーの典型的な効果の 1 つである (Michaelis and Feng 2015)。

一方、この表現に慣れ親しんだ聞き手であれば、ここで直接的応答が要請されていると理解するのではなく、何か目新しい情報が提示されるのではという期待を抱きつつ、相手の話にいつそうの注意を向けるというのが適切な対応であろう。WYTXyty は、話し手の側からは、代名詞 you の選択により聞き手の立場に共感的に寄り添ってみせるとともに、聞き手にコミュニケーション上の協調 (注意の振り向け) を促す符丁として機能すると考えられる¹³。

次に、WYTXyty が具体的に使用される場面に注目し、ここまで述べてきたアイロニーとしての WYTXyty が機能する談話・語用論的な背景について考えたい。実はこの表現は、話し手が独占的に有する情報を、聞き手に提示 (助言・教示) するという場面で使用されることが多い。先に見た (4) の 2 例は、いずれもテレビのレポーターによる報道であった。現場を取材するレポーターの語りは、スタジオの司会者 (そしてその背後にいる視聴者) に向けて、一般常識に反する状況を提示する前置きとして、WYTXyty を使用している。次の事例は、いずれも広義の宣伝 (プロモーション) の文脈での使用例である。

もしくはその他の要素からなる連続的もしくは非連続的な連鎖で、既成である (と思われる) もの: (既成であるとは) 使用時に、文法によって生成・分析されるのではなく、記憶から丸ごと取り出されるということ)。

12 空のスロットを持つ構文表現 (とりわけ複文構造を持つ表現) が特定の談話・語用論的機能を担うことを論じた最近の事例研究として、If I didn't know better, I'd think SV を仮定法の戦略的使用として分析した平沢 (2020) や、X they said Y they said を当てこすり (sarcasm) の表現として分析した Spreadbury (2022) などが挙げられる。

13 Quirk et al. (1985: 354) では、代名詞 you の総称用法には相手の立場に立ってみせることにより聞き手の共感を喚起する機能があるとされている。関連して、平沢 (2019) は、代名詞 you のみならず、'when you' という連鎖が聞き手の共感を喚起する機能を持ち、複数の構文表現に組み込まれていることを指摘している。

- (19) a. **When you think snails you think a sticky gross mess**, but I had heard so many good things about this moisturizer that I had to try it. (iWeb)
- b. **Think fjords, and one usually thinks Norway, or even Chile**. But visit Milford Sound -- one of the 15 fjords that make up New Zealand's largest national park -- and you'll see why Rudyard Kipling claimed it as the Eighth Wonder of the World. (COCA, 2012 BLOG)

保水クリームのレビュー記事からの引用である(19a)では、「カタツムリといえば、なんかねばねばして気持ち悪いですよね」と述べてから、カタツムリの成分を使った保水クリームの効能について体験的な報告として読者に当該の商品を勧めている。(19b)は、観光案内として「フィヨルドといえば、ふつうノルウェーとか、あるいはチリかもしれませんね」と述べてから、「でも、ニュージーランドのミルフォード・サウンドもおすすめですよ」と代替の旅行プランを勧めている。いずれの事例においても、話し手が独占的に有し、聞き手（および一般の人々）が想定していないと思われる新奇で有益な情報をこれから提示するという場面で、WYTXyty が使用されているのである。

このように考えると、変異型を含む WYTXyty の関連表現において人称代名詞 *you* が選好される背景には一定の根拠があるといえることができる。総称用法を持つ人称代名詞の本来の語彙的意味の帰結として、*we* と *they* はともに話し手と聞き手が一体化されるという共通点がある。*we* の総称用法は、一体化した話し手と聞き手を人々一般に包含する解釈となり、*they* の総称用法は逆に、一体化した話し手と聞き手をその他の人々から排除する意味機能を持つ。それに対し、*you* の総称用法では、聞き手を人々一般に包含しつつ、語彙本来の意味に基づき、話し手自身はそこから切り離される¹⁴。つまり、総称用法の文脈で *you* を選択することは、話し手だけを非対称的に聞き手を含むその他の人々一般から切り離し、特権性を与えることになる。上で述べたような、話し手が独占的に新規な情報を聞き手に提示する場面において、否定されるべき一般常識（＝現状）を転嫁的に再現するのに、代名詞 *you* と動詞 *think* の組み合わせはもっとも矛盾のない自然な選択であると言える¹⁵。

話し手が新規な情報を特権的に聞き手に提示（助言・教示）する場面で、WYTXyty がある種のアイロニーを含む表現として機能すると考えると、単にこの表現が話しことばで使われやすいというだけでなく、特定のコミュニケーションの場面に特化した言い回しであるといえる。ジャンル文法 (Biber and Conrad (2019) ; Dorgeloh and Wanner (2023), Iwasaki (2015)

14 総称用法の代名詞 (*we*, *you*, *they*) がそれぞれ本来の人称代名詞としての語彙的意味のニュアンスを残していることについては、Quirk et al. (1985: 354) に指摘がある。

15 平沢 (2020) は、If I didn't know better, I'd think SV 構文の分析において、「SV であると思っている主体の候補から自分（話し手）を排除して見せることは、その思考の原因を外在のモノに帰属させて主張の説得力を高めるための戦略として機能する」（前掲論文: 73）と述べ、「このような思考主体候補からの自己排除は、様々な言語で会話におけるある種の戦略として利用される」（前掲論文: 72）と指摘している。WYTXyty が構文として成立する背景にも、同様の思考主体候補の自己排除の戦略が関与している可能性が考えられる。

も参照)の観点からすると、この表現は、主に報道番組のレポートや商品の宣伝というような特定のジャンルにおいて戦略的に採用され、確立しつつある構文表現であるという可能性が示唆される。

最後に、留意すべき検討課題として、上で見た表2の結果からもわかるように、WYTXytyが常に逆接的文脈で使用されるわけではないということがある。調査した範囲では、代名詞you(およびthey)の場合ほぼ半数を超える事例が逆接的文脈での使用であり、これは、すべてではないにせよ、当該表現が文脈に応じて選択されているケースが相当数あることを示唆している。言い換えれば、この表現の典型的な使用文脈を認識し、そのアイロニー的な談話・語用論的機能を念頭に使用する話し手、およびそれを理解する聞き手が一定数存在しているはずである。ある構文的表現が、一定の談話・語用論的機能を持つというとき、それが必ずしも全ての事例に当てはまるわけではないということはたびたび指摘されている。「異なる機能は、異なる構文に対応する(different functions, different constructions)」という構文文法の一般的なテーゼとは齟齬が生じうるが、例えば、Michaelis and Feng (2015: 176-177)の分離疑問文の分析では、当該構文が常に当てこすり(sarcasm)の解釈を持つわけではなく、誠実な(sincere)用法と、当てこすりとしての振り(pretense)の用法が、同じ形式でそれぞれに存在することを認めている(ただし、韻律上の微妙な差により区別される可能性も示唆されている)¹⁶。WYTXytyの場合には、この表現が様々な変異型とともにプロトタイプ・カテゴリー的ネットワークを形成しつつ、使用場面がジャンルの限定され、構文化プロセスの途上にある表現(よくある言い回し)であり、形式と(談話・語用論的)機能の対応がいまだ不完全であるため、一般的な構文として広く認知されるにはさらなる「淘汰」が必要とされる段階にあるというのが、本稿における暫定的な結論である。

6. 終わりに

本稿では、これまでの文法研究や語法研究では注目されたことのないWhen you think X, you think Yという表現が、主に会話などくだけたスタイルにおけるよくある言い回しとして、様々な変異型を伴うプロトタイプ・カテゴリー的ネットワークを構成する構文化のプロセスにあることを、コーパス調査の結果に基づいて指摘した。この表現は、談話・語用論的機能としてある種のアイロニーの解釈を伴って使用されることが多く、当該表現がテレビの報道番組や商品の宣伝など、話し手が独占的に有する新奇で有益な情報を聞き手に提示するような特定の場面に対応して確立しつつあるジャンル依存的な構文表現である可能性について論じた。

16 1つの構文形式に対応する語用論的含意の解釈が一樣ではないという点については、Spreadbury (2022)のX they said Y they saidの分析における議論も参照されたい。

参考文献

- Biber, Douglas and Susan Conrad (2019) *Register, Genre, and Style*, Second Edition, Cambridge University Press, Cambridge.
- Crystal, David (2021) *David Crystal's 50 Questions About English Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Dixon, R.M.W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, 2nd ed., Oxford University Press, Oxford.
- Dorgeloh, Heidrun and Anja Wanner (2023) *Discourse Syntax: English Grammar Beyond the Sentence*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 平沢慎也 (2019) 「英語の接続詞 when—「本質」さえ分かっていたら使いこなせるのか」森雄一・西村義樹・長谷川明香 (編) 『認知言語学を紡ぐ』, 161-182, くろしお出版, 東京.
- 平沢慎也 (2020) 「よくある言い回しに隠れた戦略的仮定法—If I didn't know better, I'd think SV は SV と思っていない人が使う表現か—」『東京大学言語学論集』 42, 59-86.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2022) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Iwasaki, Shoichi (2015) "A Multiple-grammar Model of Speakers' Linguistic Knowledge", *Cognitive Linguistics*, 26 (2), 161-210.
- Michaelis, Laura A. and Hanbing Feng (2015) "What Is This, Sarcastic Syntax?" *Constructions and Frames*, 7(2), 148-180.
- 中山仁 (2016) 『ことばの基礎 1 名詞と代名詞』, 研究社, 東京.
- Perek, Florent (2015) *Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Spreadbury, Ash L. (2022) "X they said Y they said as a Sarcastic Multi-sentential Construction," 『認知言語学論考』 No.16, 137-164.
- 鈴木亨 (2022a) 「動詞 think の自他交替について—前置詞脱落の意味論」島悦郎・富澤直人・小川芳樹・土橋善仁・佐藤陽介・ルプシャ・コルネリア (編) 『ことばの諸相—現在と未来をつなぐ』, 272-282, 開拓社, 東京.
- 鈴木亨 (2022b) 「動詞 think の疑似他動詞用法の拡がり—談話・語用論的機能からの考察」小川芳樹・中山俊秀 (編) 『コーパスからわかる言語変化・言語理論 3』, 87-100, 開拓社, 東京.
- Taylor, John R. (2015) "Prototype Effects in Grammar," Ewa Dabrowski and Dagmer Divjak (eds.), *Handbook of Cognitive Linguistics*, 562-578, Mouton de Gruyter, Berlin.

ウィルソン, デイアドリ, ティム・ウォートン (2009) 『最新語用論入門12章』, 大修館書店, 東京.
Wray, Alison (2002) *Formulaic Language and the Lexicon*, Cambridge University Press, Cambridge.

コーパス

Corpus of Contemporary American English (COCA), Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies)
(<https://www.english-corpora.org/coca/>).

Corpus of Global Web-Based English (GloWbE), Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies)
(<https://www.english-corpora.org/glowbe/>).

The Coronavirus Corpus (Coronavirus), Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies) (<https://www.english-corpora.org/corona/>).

The 14 Billion Word Web Corpus (iWeb), Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies) (<https://www.english-corpora.org/iweb/>).

On the Ironic Use of *When you think X, you think Y*

Toru SUZUKI

This paper proposes that the English expression *When you think X, you think Y*, which has received little attention in the grammatical literature to date, is a conventional phrase primarily used in spoken-language environments. Based on the corpus analysis, it is shown that the expression constitutes a network of prototype category with a variety of structural variants. We argue that the expression is often employed as a ‘conversational gambit’ with a touch of irony. Additionally, we discuss the possibility that it is a genre-dependent construction shaped within a specific communicative situation where the speaker intends to present useful and novel information to the listener, as observed in TV news programs or product promotions.

